

宇佐見興子

ひづ
めの
音
が
聞
こ
え
る



著者●宇佐見興子（うさみきょうこ）

本名佐藤興子。岡山県に生まれる。早稲田大学法学部卒業。日本児童文学学校の第12期生として学び、故安藤美紀夫氏に師事。「ジャングルジム」同人。日本児童文学者協会会員。作品に『チュー助大江戸事件帳』『遠い国からきたサンサ』などがある。

画家●平田恵子（ひらたけいこ）

1956年、山口県に生まれる。京都産業大学でインドネシア語を専攻。卒業後、コピーライターとして活躍するとともに、油絵や墨絵などの創作と発表をつづけている。さし絵の仕事は本書がはじめてである。

ベスト・セレクション 4

ひづめの音が聞こえる

1994年7月10日初版1刷発行

著 者 宇佐見興子

発行者 鈴木正明

発 行 株式会社国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(3943)3721(営業) 8051(編集)

印 刷 株式会社厚徳社

製 本 株式会社難波製本

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします。

NDC913 / 223p / 22cm ISBN4-337-20804-6 C8391

Printed in Japan ©宇佐見興子／平田恵子

ひづめの音が聞こえる

宇佐見興子



国土社

もくじ

一 おねがい！ ヨウスイ…………… 6

二 ささやくのは、だれ？…………… 17

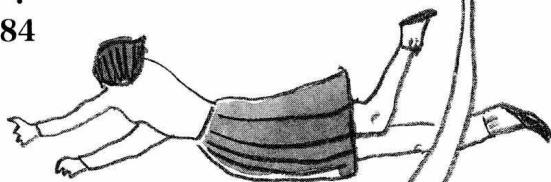
三 いまから、あなたは…………… 34

四 かくれ牧場…………… 53

五 洛陽の人々…………… 69

六 その人はジンジー…………… 84

七 記憶のむこう側…………… 103



八 美齡メイリンの行方ゆくえ.....119

九 野盜襲来やとうしゅうらい.....142

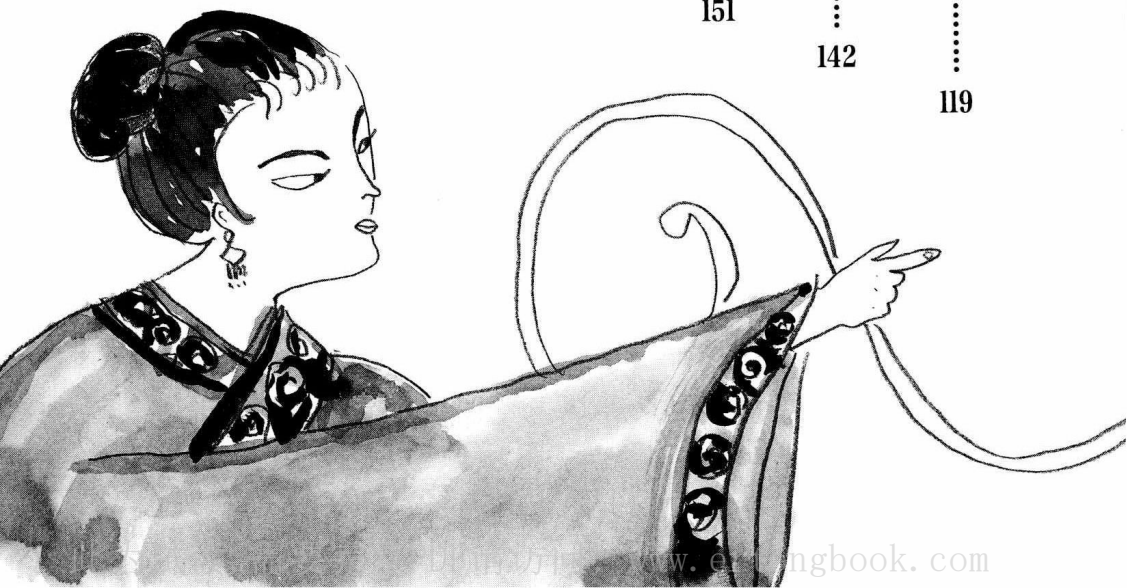
十 虎とらの目めとの対決.....151

十一 緑の石.....166

十二 太子の秘密ひみつ.....177

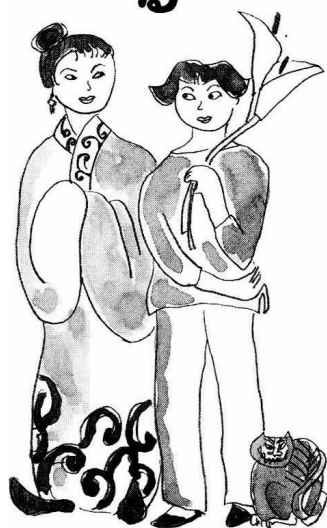
十三 ひづめの音が聞こえる.....205

あとがき.....222

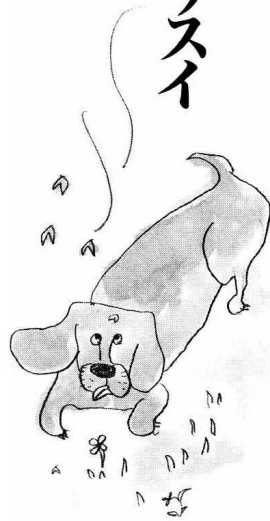


画 平田恵子
装幀 向井恵子

ひづめの音が聞こえる



1 おねがい！ ヨウスイ



どうしてこんなにザワザワするんだろう。せきをしてしんこきゅうも深呼吸しても、胸むねの中の四角い空気はでていかない。ゆうべも、ほとんど眠ねむれなかった。こんなことははじめて。でも、ずっと前から決めていたんだし、やるしかないんだ。

「ヨウスイ、いくわよ」

午前七時十五分前、私はいつもより一時間も早く家をでた。

走りだそうとするヨウスイをよびとめて、門の外で立ちどまる。制服のひだスカート、アイロ
ンがけが二か所失敗。白いソックス、これはおろしたてだからオーケー。髪かみの毛、つけすぎたム
ースで前髪まえがみがごわごわ。ひっぱって、ひたいに四、五本たらず。

姉が、カバンをかかえて玄関げんかんからとびだしてきた。神奈川県立高校の二年生、三年連続遅刻ちこくゼ

口に挑戦ちようせんしている。

つづいて、腕時計うでを見ながら父。かけだそうとして私を見る。

「お。やつと部活ぶくわつに出る気になったな」

「え……」

「ええ子じや、ええ子じや」

故郷ふるさとの言葉ことばを連発しながら、ドタドタと坂を下りていった。

父の期待をうらぎってわるいけど、朝練あされんなんかじゃないの。だいいち、胴着どうぎも竹刀しなも持つてないですよ。

母が、玄関げんかんから顔をのぞかせた。

「あら！ ヨウスイ。外にでちゃだめ。鎖くさりどうしたの、ヨウスイ、ヨウスイったら」

母は、この世で一番好きすな歌手の名前を犬につけるのは、まことにおそれ多い、とかいいながら、毎日その名を連発している。

よばれたほうは知らんぷりして、またまたと坂を下りはじめた。

「いうときかないと、ごはんぬきよ！」

これにはよわい。あわてて立ちどまり、考えこんでいる。

私の胸むねの中が少しやわらかくなって、ザワザワがそのぶんだけ、体のどこかに散らばった。

「もどっちゃだめ。おねがい！ ヨウスイ」

ウオン！ だって。もつと凜凜しくほえてくれないかなあ。おまえだけがたよりなんだから。母を無視して、私はゆつくりと坂を下りる。目は、三軒下の坂本さんちの家の門に、きつちりとそそいだ。

七時ジャスト。紺のジャージに学生カバンとバスケットシューズをさげた良が、でてきた。あのバツシュが、ダンクシュートを決めるんだ。

思ったとおり、ヨウスイがしつぽをふって走りよる。

良は、立ちどまり、しゃがんで頭をなでた。

「おまえ、元気だったか。ほら、サービス」

指で、おなかを丸くかいている。ヨウスイの一番好きなこと、わすれてはいないらしい。サービス……なつかしい言葉。良は、いま、わらっているだろうな。目がどんどん細くなって、やさしい顔してるだろうな。

良は立ち上がり、こつちを見た。もうわらってはいない。

また、胸が硬くなりはじめた。

でも、いましかない。いそいで追いぬき、ふりむいた。ほおが、ひきつつてくる。

「お誕生日、おめでとう」

一気にはきだした。でも、声がかすれてはつきりといえなかった。

良が、え、というふう^{まゆ}に眉を動かした。

もういちどいわなきや……できない。

「ヨウスイ、だめじゃないの。鎖^{くさり}はずしてきちゃ。家へ帰りなさい！」

かわいそうな子は、あわてて私にかけより、不思議^{ふしぎ}そうに見上げてから、良の足でまたちよつと遊び、お尻^{しり}をふりながら坂を上っていった。

良が、かけ足で私を追いかけていく。

風がでたのか、坂の両側にぎっしりと建っている家のどこからか、桜^{さくら}の花びらが舞^まってきた。

最悪の金曜日。

「おーい。ちよつと集まれえ」

父が、帰ってきたらしい。三分ほどして、

「まあ、なんという美少年！」

母が、家中のみんなに知らせた。

「どおれ」

姉は、すぐに反応したようだ。

夕食後のひととき。私は、洗面所^{せんめんじょ}で歯をみがいている。

目の前の鏡^{かがみ}の中に、丸い顔した中学二年生の女の子。口をゆすぎ、むりしてわらってみた。

かわいい？ ノー。それにひきかえ姉は……すきとおるような白い肌^{はだ}、ひとえだけど切れ長で、おりこうさんな目、形のよい鼻と唇^{くちびる}、ほっそりとしたスタイル。それに、さらさらの長い髪^{かみ}。

そうなの。私は、何もかも姉の正反対というわけ。私が姉に勝っているところは、ただ一つ。背^せが三・七センチ高いこと。一六五センチメートルある。体重が四・五キログラム多く、靴^{くつ}も一・五センチ大きいのは、このさい自慢^{じまん}にならない。

ダイエットは、なぜかきかない。むしろ、ストレス^{しよくす}が食欲^{しょくよく}を増^ましている。

ヨウスイが、だあつと走ってきて、足に体当たりした。んもお、遊ぶ気になれないんだってば。あつちにいけ！

「なにしてるのかな」

母が、後ろに立っている。

「わらう練習」

母は、鏡の中をじつと見つめた。それから、ふざけたように伸び^のび上がると、私を背中^{せなか}からはがいじめにして、耳の後ろにほおをこすりつけた。

「やめてよ。もうミルクのにおいなんて、しないんだから」

「あのこと、やっぱり気にしてるのね」

「あとでいくから！」

いつになく低い母の声をさえぎって、私は顔をざんぶざんぶ洗った。

母は、もどっていったらしい。

あのこと……それは先月の末、春休みが始まってすぐの日のことだった。

五歳の時から父といっしょに通っている剣道の道場で、ほかの道場との対抗試合があった。めずらしく風邪をひいて、朝から熱が三十八度二分もあり、吐き気もあったけど、代わりがいなくて休むわけにもいかず、いよいよ私の番。相手は太った、見上げるように大きな中学生の男子で、立ちあつた瞬間、いやな予感がした。

ほんの少し、すり足で前にでて、相手のムフーという鼻息をきいた時——ほんとうにきこえたし、吐く息のにおいまでわかったような気がする——また吐き気がおそってきて、思わず顔をそむけそうになった。そんなすきを見つけたのか、相手は、真上からジェットコースターのように打ちかかってきた。

気がつくと、私は竹刀を放りだし、両手で頭をかばってうずくまっていた。もしかしたら、キヤアときけんかもしれない。なんという無作法。だから女はだめなんだ、というささやき。父のうろたえたような目。それきり、道場にはいつていない。部活も休んでいる。

「ちがうの！」

私のほんとうの悩みは、そんなことじゃない。じつは、その事件の十日前から、すでに始まっていたんだ。家の者が、だれも気づいていなかっただけ。

あの日——私は、姉といっしょに、庭の百日紅さるすべりにきた尾長おながをそつとながめていた。急に羽音を立てて飛び立ったので、ふりむくと、門の所に良りょうがいる。

「おやじが、ヨーロッパの出張から帰ってきて。これ、ワイン」

良は、私だけを見て、ぶっきらぼうに告げた。まるで、姉がそこにいるのを気づかないように。言葉ことばをさがしている私の横で、姉が、ちよつとすましていった。

「父がよろこぶわ。いま、留守るすだけど。よろしくお礼をいっておいてね」

すると、良は、やっぱり姉の方を見ないで小さくうなずいた。その時、私は見てしまった。良が、はにかんだように、ほほえんだのを。顔は私の方をむいていても、目も耳も姉を見ている。私には、いちどもそんなことをしてくれないのに……。

くそつ。どうしてこうなっちゃうの。私って、こんなにじめじめしてたっけ。だれかたすけてください。何でもします。

「ちよつとおいでってば」

姉が、顔をのぞかせた。

「美少年がね。坂本さんちの良^{りよう}くん^に、そっくりなの」

え、こんな時に、まるでおあつらえむきじゃないの。でも、できるだけ、さりげなく……。

「テレビにでてるの？」

「ちがう」

「じゃ、雑誌^{ざうし}」

「はずれ。これが、なんと、お墓^{はか}の中」

「お墓の中！」

大好物^{だいこうぶつ}で、釣^つるつもりなんだ。小さいころから私は、怖いものならなんでも大^{だい}好^すき。お墓の中
ということは、もしかして、良に似た吸血鬼^{きゅうけつき}……まさか……。

ご希望どおり、えさにくいについて、姉のあとからリビングルームにでていった。

母がうれしそうにクッションを投^なげてよこし、ヨウスイはあわてて走りよって、クンクンとサ
ーピスを待っている。隣^{となり}にすわった姉の腕^{うで}が、私の腕^{うで}にからんではなれない。

美少年は、一枚の写真の中にいた。

あ、そっくり！ 吸血鬼は、はずれ。人形だった。

「ぼくは、今日、上野の東京国立博物館にいつてきた」

父は、風呂あがりのビールを飲みながら、満足そうにみんなを見まわした。

「中国陶俑の美展。そこで、この少年を見つけた。なんともかわいいだろ。凛凛しいだろ」

「トウヨウって、いったいなんなの」

私の知識の中には、ひとかけらもない。

「陶というのは、たとえば、陶器とかいうように焼き物のこと。俑は、中国で殉死者の代わりに、お墓に埋められた人形のこと、よね」

姉が、すかさずこたえる。

「そのとおりだ。日本の埴輪や土偶のようなものだな」

私は、姉の背中にささやく。

「殉死者って、仕えているご主人さまが亡くなると、私めもごいっしょにつて、あとを追って命を捧げる家来なんかのこと、だっけ。テレビの時代劇で見たことあるけど」

姉は、あつたりまえでしょ、というふうに私をななめに見る。

この人形は、唐時代のもので、いまから千三百年ほど前のものらしい。写真の裏に書いてあるむずかしそうな字は、お墓の名前で、『懿徳太子の墓』と読むのだそうだ。

太子、つまり皇太子のことだ、と父がいう。

「この人形が、その皇太子の家来ということとは」

姉が、身をのりだした。

「実在のモデルがいる、ことよね」

「人形のみんなとはいえんだろが、モデルはいると思う。それに、驚くことに……」

父は、ちよつと声をひそめた。

「初期のころには、生きたままの奴隷が、馬や牛といっしよに埋められたこともあったらしい」
「なんですって。そんなにおどろおどろしいもののなの」

母が声を上げ、写真を見直す。

「まあ、そういうこともあったということさ」

どれどれ、私にもちゃんと見せて。ふうん。太子の名は、日本の聖徳太子と一字ちがいのね。懿徳太子……『懿』の字って、『土にワに豆、次に心』。なあんだ、けっこうおぼえやすい字じゃないの。こう見えても私、漢字のテストだけは、いい点とるんだ。

ウォン、ウォン。ヨウスイが、さいそくする。

「とにかく、すごい。不思議の国、中国。そうだ！ あさっては日曜日。いきなさい、母さん、二人をつれて」

「中国陶俑の美展、かあ。なんだか堅苦しそうだけど。そうね、見ればわかるわね。パンダ、シルクロード、黄河、西遊記、三国志、楊貴妃、遣唐使。唐の都は長安、いまは西安っていうらしいけど。テレビで見たわ」